

JICA 関西訪問

海外協力隊経験談 織田 芳孝氏「スリランカ、インドネシアへの派遣」

気持ち良く晴れ渡った 5 月 8 日、会員 13 名が参加して、新年度最初の行事「JICA 関西訪問」(神戸市灘区)が行われました。プログラムは、「JICA の事業概要」と「JICA 海外協力隊による経験談」の 2 部構成の講演、エスニック料理を楽しむランチと展示室の見学で、10 時 30 分から 13 時 30 分までの意義ある 3 時間でした。



会場では、先ずご担当の JICA 蓬莱様からの「世界に国は何か国？その人口は？（196 か国、81 億人）」「開発途上国は何か国で人口は？（150 か国、60 億人以上）」との質問で一気に関心が世界に開かれました。独立行政法人国際協力機構（JICA）は、日本政府の国際協力（ODA）の内、二国間援助の「技術協力」「有償資金協力」「無償資金協力」を一元的に

担っていて、約 100 か所の海外拠点を持ち、150 の国・地域で事業を展開しているとのこと。一方、2011 年の東日本大震災の後、日本は 174 か国（地域）からその年世界で一番多くの支援を受けた国でした。助け、助けられ、まさに「信頼で世界をつなぐ」という JICA の組織ビジョン通りの実績の一つがここにありました。



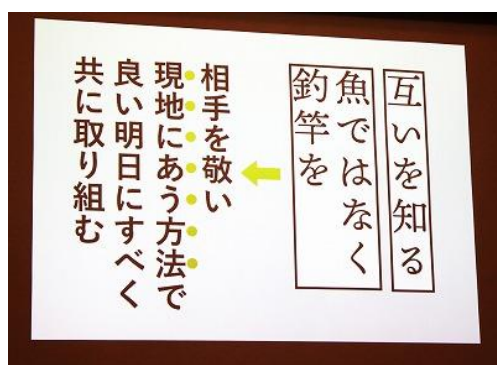


さて、いよいよ海外協力隊参加の経験談を拝聴する時間になりました。講演者は織田芳孝氏：1999~2001年 スリランカでサッカーの指導 2016~2018年 インドネシアでデザインの指導

最初は新卒での派遣、二度目は社会での経験を積んでからの派遣。二つの国で二度の違う分野で派遣経験をされているお話に期待が高まります。

スリランカでは、少年たちを公園に集めてのサッカー教室を始める一方、派遣先の市役所のサッカーチームと一緒に汗を流して友好を深めました。派遣先のスリランカは当時、シンハラ人とタミル人の間に内戦が起きていましたが、居住されたキャンディ市という紅茶の産地では、シンハラ人とタミル人は仲良く生活していたそうです。とは言え、緊急事態も起こりかねないそのような社会状況下で、（合宿で学習されたとはいえ）日本人にとって耳馴染みのない公用語のシンハラ語に御苦労されたと推察しましたが、「安全面は保証されていました」とさりと振り返られて、織田氏はむしろスリランカに『多様性のある社会の強さ』を感じられたとのことでした。

また、二つ目の派遣国はインドネシア。国是が『多様性の中の統一』で、300の民族と700の言語を持つ国。マカッサル市に派遣された時は、ご自身が15年の社会経験を積まれた後で、デザインの指導を担当されました。パッケージ・デザインの相談に乗りながら、その効果で売り上げが上がる事を現地の皆さんにアドバイスされました。



ただここで問題なのが、一つの言葉から想像されるイメージが日本人とインドネシア人とでは大きく違うという事。例えば「バナナ」と言えば日本人は色も形も大きさも食べ方もほぼ同じものを浮かべますが、インドネシアには多くのバナナの種類があって、思い浮かべるイメージが様々。風習・価値観・イメージはそれぞれの気候・言語・国の文化

や歴史という環境で育まれてくるものだを知り、『互いを知る』ということが大きな要素だと理解できたとのこと。また、指導の時に心掛けたのは、相手に提供するの『魚ではなく釣竿を』、つまり、直接沢山のパッケージを作ってあげるのではなく、どのように色・デザインを決めてどのように作り上げるかを相手にアドバイスをして、相手が自分で作れるようになることが大事ということです。その裾野を広げるため織田さんはデザインに関するセミナーを現地同

僚と共に担当され、方法や考え方を、多くの中小企業や個人、学生の皆さんに伝えることが出来られたそうです。

二つの国で織田さんのお考えの根底になったのは『相手を敬い、現地に合う方法で、良い明日にすべく、共に取り組む』という事だったそうです。このことは、現在の我々へのメッセージともなります。国際化が進む環境の中、国内外で相手を思い共に成長することの本質だと感じました。派遣滞在中に一つだけ困ったことがあるとすれば、それはトイレだったそうです。トイレトーパーの無いトイレに小さなバケツと水の入った水槽があるだけ。さあ、あなたなら一体どうしますか？

貴重な経験談を拝聴した後に、織田氏が現在プロのカメラマンでいらっしゃる事を忘れて、集合写真を御一緒に。参加者の満足そうな表情と共に、心からの感謝を織田様にお伝えしたいと思います。ありがとうございました。



<初めての「JICA 関西訪問」>

参加者の感想> 「海と山に挟まれた神戸らしいロケーションと広々とした脇浜海岸通に面した建物はきれいで素晴らしかったです。セミナールームで、JICA 海外協力隊としてインドネシアとスリランカで活動してこられた方の体験談はとても楽しく、若い人達が聴いたらきっと参加してみたいかならうなと思いました。ただ、今は世界情勢が不安定で、ボランティア活動にも影響しないかと不安になります。」

「とても楽しかったです。JICA の方のお話は、世界に目を向けるいい機会になりましたし、自分の知らない世界が知れて勉強になりました。」

「講師の方から、海外協力隊には 180 以上もの職種の支援があることや、東日本大震災の年に世界で一番支援を受けた国が日本であったことなど、知らなかったことをたくさん教えていただきました。また、言語や習慣の違いを理解して支援し合うことが大切で、それが世界全体を救う事に繋がるのだということが分かり、大変勉強になりました。東南アジア料理も美味しくいただき、お腹も心も満足して帰宅しました。」



レストランでエスニック料理を味わい、展示室(右)では SDGs のわかりやすい展示に学びました